

## 連載 堀口捨己の『利休の茶』を読む③ 茶会と心

近藤 康子（京都橘大学講師）



近藤 康子（こんどう・やすこ）

1985年生まれ。2008年京都大学工学部建築学科卒業。2014年同大学大学院工学研究科建築学専攻博士号（工学）取得。

2014 - 2016年 京都橘大学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科助教。2016年-現在 同大学講師。主な著作に「近代建築家の茶室論にみる茶の湯の生活空間に関する研究」（博士学位論文、2014）、「建築制作論の研究」（共著、中央公論美術出版、2016）。

### 古溪銭の會

今回取り上げる堀口捨己（1895-1984）の論考「利休の茶」（『利休の茶』、岩波書店、1951）。以下本文中[利休]は、「利休の茶の完成」「利休の茶の表現」「利休の茶の思想」「利休の茶の性格」の四節から構成される。第一節の「利休の茶の完成」において堀口は二つの茶会記を取り上げている。かれの言によれば、それらは「古溪銭の會」と「立石紹林一人客の會」と呼ばれ、それぞれ「鋭いはげしい茶會」[利休-179]と「穏やかな會」[利休-182]として対比的に位置づけられている。とりわけ前者の茶会については「利休の茶の心行く儘を見、獨り創り出す域を見て、利休の茶の仕上りと同じく、日本の茶の湯の完さを見た」[利休-180-181]とされ、また「利休の茶の表現」「利休の茶の思想」「利休の茶の性格」において、各側面から千利休（1522-1591）の茶が考察されるなかで、それらの「完成」として常に参照されるなど、その重要性が示されている。一方で後者の茶会については、常に参照されるわけではなく、参照されたとしても必ず前者の茶会の後に言及されており、あくまでも「鋭いはげしい」と形容されるとき利休の茶の際立った特質を、「穏やか」という対極の側面から補完するものとして位置づけられていたといえる。堀口がこれほどまでに注目した「古溪銭の會」とは、どのようなものであろうか。

茶会の概要をみていこう。この茶会は天正16年（1588）、利休の参禅の師である古溪宗陳（1532-1597）が、豊臣秀吉の怒りにふれて大宰府に流謫の身となったために、利休が古溪との別れを偲んで特別に開いた送別の茶会として知られる。主人は利休、客は大徳寺の禅僧三人、古溪、春屋宗園（1529-1611）、玉甫紹琮（1546-1613）と、三井寺の本覚坊蓮好（生没年不詳）である。ただし、本覚坊については「利休の茶を助ける役が、あてられてみたごとくである」[利休-174]といわれるように、この茶会の本来の

客は大徳寺の禅僧三人と推測されている。堀口はこの茶会記をとりあげた理由を次のように説明する。

（前略）掛物を茶會の道具として、そのやうにまで重く使ふことは、他にさう例があるものではなかつた。…（中略）…そのやうな稀な事柄を取り上げて、利休の茶を見たのは、物の組み合わせを見立てる働の冴えを見るにあつた。それは總ての組み合わせに通ふ取り合せの強さが、他に比ぶ可くもない程であつた。[利休-197]

堀口は、利休の掛物の使い方に着目しており、とりわけ見立てる働きに「冴え」を見出している。引用では見立てと取り合せという語が用いられており、これらは茶道一般においても用いられる語である。見立ては、事物を別の場面において転用する、取り合せは、組み合わせるという意味で用いられる。これらの意味をふまえて、引用をみよう。一茶道具の見立てが、物の「組み合わせ」という集合への働きと示唆されており、また取り合せと「組み合わせ」という語が使い分けられている。すなわち、ここでは見立てたうえで取り合せることが「組み合わせ」という語によって表現されていると考えられる。それでは、堀口が注目した「組み合わせ」とは如何なるものであろうか。

### 茶道具の組み合わせ

「古溪銭の會」に用いられ、堀口がとりわけ注目した掛物は、茶会の客が属する大徳寺派の祖にあたる虚堂智愚（1185-1269）の墨蹟である。堀口は、「臨濟宗のうち、わけでも大徳寺には縁が深く、それだけの因みでも、この掛物は誠にこの會にふさはしかつた」[利休-174]と述べている。「因み」とは客と掛物との関係と解される。ここでは宗派上の関係のみが指摘されるが、「それだけ」でもふさわしいと言われるように、堀口が客と茶

道具との関係のありように着目していることがわかる。次の言をみよう。

それが誰の筆になつたかは、茶の湯では、誰が持つてゐたかと同じやうに、その誰かを茶會の組立ての中に、一人の人として見立てて働かせ得るからであつた。…（中略）…その墨蹟に向ふことは、その人に會ふにも等しい心の引き緊りと、張りを覺えさせたに違ひなかつた。[利休-220]

掛物が虚堂智愚その人に見立てられたとされる。つまり、虚堂智愚という古の人が、その茶会に参加する非実在の人として想定されているのである。掛物と客との関係として先に宗派が見出されていたが、ここでは虚堂智愚と客との立場が見出されている。そして「引き緊り」「張り」と言われるように、このような関係性による客の「心」への働きかけが指摘されている。さらに、次の言をみよう。

（引用注：利休がこの掛物を見立てたのは）なかに書かれてあつた詩の含みを、この茶會のために特に書かれた如くに、生かして使ふことにあつた。…（中略）…この中の詩の「木の葉は枝をはなれて、霜氣はきよい」と述べてゐた初めの句は、舊曆の九月でもあつて見れば、季節にまあ合つてゐる。頭角を表はした俊れた僧が禪門を出ると云ふ承句に到つては、全くそのときの古溪のために、特に選ばれた句としか思はれなかつた。東西南北、人なき境を悟り、急ぎ歸りきたつて、この情を語れと云ふ句は、全く春屋や玉甫が古溪に對つての切な心もちの表れそのもの、そのまゝであつたであらう。利休や本覺の心も、また同じであつたに違ひない。[利休-174-175]

掛物の詩の内容がこの茶会のために書かれたものとなぞらえられたとされる。引用の後半で三つのなぞらえが具体的に語られてい

る。一つめは時節である。時節の重ね合わせについて、堀口は「まあ合つてゐる」という言葉で表現する。二つめは状況である。「僧が禪門を出る」という詩の内容を、古溪が大宰府に配流されるというその時の状況に重ね合わせている。堀口は「特に選ばれた」という言葉によって、この重ね合わせの重要性を表現している。最後の三つめは「急ぎ歸りきたつて、この情を語れ」という内容を、古溪との別れを惜しむ気持ちになぞらえている。ここでは春屋、玉甫、利休、本覚坊の四人とも同じ心持ちであつたとされるが、春屋と玉甫、利休と本覚坊とが二文に分けて書かれていることから、前者と後者に差異づけがなされていると思われる。上述のとおり本覚坊が利休の手伝い役とされることから、利休がとりわけ詩の内容との重ね合わせにおいて真に主題化したのは、本来の客であるところの古溪そして春屋、玉甫であつたと堀口は捉えているといえよう。かれは「表れそのもの、そのまゝ」として、まさに客の心境にまで踏み込んだなぞらえの的確さを表現している。

先に堀口が客と茶道具との関係に着目していることを示した。堀口は掛物という一つの茶道具に、宗派、立場、時節、状況といった形式的なものから、形式性を超えた極めて個人的な「心」にまで及ぶ限りなく強い関係づけをなす利休の働きを見出していたのである。そして、このような働きこそ堀口が「冴え」を見出した利休の「組み合わせ」の仕方であることがわかる。また虚堂智愚その人になぞらえることによる客の「心」への働きかけがすでに指摘されていたが、このような「心」にまで及ぶ「組み合わせ」の仕方こそ、堀口の指摘する客の「心」への作用の本当の契機と捉えられていたと解される。かれは、この茶会を「鋭い」とした根拠を次のように述べている。「鋭いと云ふのは…（中略）…隙のない見立てを思ひつく心の働きの鋭さの云ひ」[利休-179-180]と。堀口は上述した「組み合わせ」なる働きの強さを、何よりもまず利休自身の「心」の働きの強さとして把握していたのである。

### 茶会の組み立て

堀口は「古溪銭の會」の考察を始める前に、「千利休の茶會記を、例にとつて、その組み立て方の一つに觸れて見よう」[利休-169]と述べている。かれは茶会の「組み立て」というある全体性を実現させる働きのうちに、先に考察した茶道具を「組み合わせ」る働きを見出していたと推察される。それでは、堀口はこの茶会にどのような「組み立て」を見出したのだろうか。

堀口はこの茶会記の考察において、掛物、茶室、点前という観点から言及している。このうち掛物については先に考察したとおりである。また茶室については、その茶室のありようが記されるに留まっており、茶会との関わりは言及されない。そして点前については、その茶会のために「特に」なされたものであつたと言われ、点前と茶会との強い関わりが示唆される[利休-176]。以降ではこの点前についての論述を通して、「組み立て」の内実を探る。

堀口はこの茶会の点前について以下の三点に着目している。一つめは、利休自身があまり好まなかつた台子の点前を選んだこと、二つめは、利休自身が否定していた仕方茶を点てたこと、三つめは、当時定式とされていた飲み廻しをしないでそれぞれの客に茶を点てたことである[利休-175-179]。まず台子の点前が選ばれた根拠について、堀口の推察が次の言に示されている。

（前略）寺方の名ある僧と、その銭のために、特に選ばれ掛けられた墨蹟を中心に、仕組まれた茶の湯には、日頃の好き嫌ひを全く超えて、この臺子の茶、臺天目の茶を、選んだのである。かくして彼の四疊半の中に、一つの調高い纏りある世界が、ゆるぎなくも打ち立てられたのであつた。[利休-260]

「寺方の名ある僧と、その銭」は先にみたと

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

おりであり、墨蹟は虚堂智愚の掛物である。「特に」「全く」と強調されるように、墨蹟と台子の点前が、錢というまさに一つの目的のために選ばれたものであることが示されている。引用の後半に着目する。「四疊半の中」と言われるように、堀口は墨蹟や台子といった物を空間的視座で捉えていることがわかる。つまり「一つの調高い纏りある世界」が打ち立てられるとは、「一つの」「纏り」といわれるある全体性、完結性をもった空間の実現が語られているのである。「かくして」と前文が引用されるように、このような空間はすべての物が一つの目的のために選ばれてこそ実現するとされる。そして空間として「調高い」とされるのは、「墨蹟を中心に」という言に代表されるような物相互の関係性に起因していると言えるだろう。堀口はこのようにして茶会を実現させようとする利休の働きに「並々ならぬ心入が潜んでゐた」[利休-261]として、やはり潜在する「心」の不可欠性を示唆している。次に茶の点て方について書かれた言説をみよう。

さて、堀口は「木村常陸介宛の傳書」（鈴木恵一編『千利休全集』、学藝書院、1941所収）にみえる「時宜は時よろしと書候、其時の能キ様子が茶湯にて候」（同書、p.110）という記述をふまえ、利休の茶の湯について「その時の宜き様子を茶の湯と観る茶の湯であつた」[利休-260]としている。そのうえで「古溪錢の會の如きは、まさによくこの境を行ひ得て、餘す處なきやうに思へる」[利休-260]と述べ、利休の茶の湯がこの茶会においてまさに実現されているとする。次の言をみよう。

また彼の云ふその時のよき様子を、茶の湯と悟ることは、その時の宜しさに従つて、その處を得て、環によく調べの合つた茶の湯を、茶の湯とすることであつたであらう。…（中略）…利休の茶は、その侘様式に纏め上げられた一つの世界であつて、直に體驗として、侘人の静かな心を、その世界に遊ぶものの心に、微風のやうに吹き込むものであつたであらう。[利休-272]

まず、利休自身が否定していた点前で茶を点てたことについて、堀口は「むかし臺子を出してゐたので、ことさらに古い手前をしてゐたのもあらう」[利休-178-179]と述べる。つまりそのような点前をしたのは、上述の台子の点前が好まれた先人の時代に合わせるためであったと推察しているのである。一方でそれぞれの客に茶を点てたことについては「一人一人に、茶の濃い淡いを見計らつて…（中略）…心行くばかりにもてなした」[利休-261]と言われる。「心行くばかりに」と強調されるように、客の好みの加減に合わせた点前は他でもなく客をもてなすためであったとされていることがわかる。先に堀口がすべての茶道具を錢のために選ばれたものと捉えていることを示した。ここではその茶道具のための点前とされること、また錢が開かれる契機ともいえる客のための点前とされることから、堀口はやはりこの点前の仕方にも錢という目的を見出していると考えられよう。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

また彼の云ふその時のよき様子を、茶の湯と悟ることは、その時の宜しさに従つて、その處を得て、環によく調べの合つた茶の湯を、茶の湯とすることであつたであらう。…（中略）…利休の茶は、その侘様式に纏め上げられた一つの世界であつて、直に體驗として、侘人の静かな心を、その世界に遊ぶものの心に、微風のやうに吹き込むものであつたであらう。[利休-272]

また彼の云ふその時のよき様子を、茶の湯と悟ることは、その時の宜しさに従つて、その處を得て、環によく調べの合つた茶の湯を、茶の湯とすることであつたであらう。…（中略）…利休の茶は、その侘様式に纏め上げられた一つの世界であつて、直に體驗として、侘人の静かな心を、その世界に遊ぶものの心に、微風のやうに吹き込むものであつたであらう。[利休-272]

利休の言う茶の湯が、堀口によって「その時の宜しさに従つて、その處を得て、環によく調べの合つた茶の湯」と解釈しなおされており、堀口が茶会というものを、その時、その場所においてしか成立しえない仮設的にしかつ特設的なものと捉えていると解される。ここではそのような仮設性や特設性が「體驗」という語によって語られていることに着目しよう。これまでの考察と考え合わせると次のことが言える。すなわち主人は錢という言、その時、その場所においてしか成立しえない茶会のために茶道具を選び、やはりその目的に沿った仕方で行為をなすことによって、台子や虚堂智愚などの歴史的な尺度を伴った時間性、非実在をも包含する空間性が重層化された経験の場をしつらえるのである。「侘人」とは利休が目指すところの「侘人」であり、「その世界に遊ぶもの」とはそ

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

の茶会にいる主人であり客であろう。「心」を「吹き込む」と言われることからこのような経験の場は、その茶会にいる主人および客が経験を通して、茶人が目指すところの「心」をそれぞれの「心」で感じとる契機の場とも言えるだろう。先述したように、堀口は利休の働きに「心」の不可欠性を指摘していたが、まさにそのような「心」の働きにおいてこそはじめて、上述の目指されるべき茶会は実現されると考えられる。

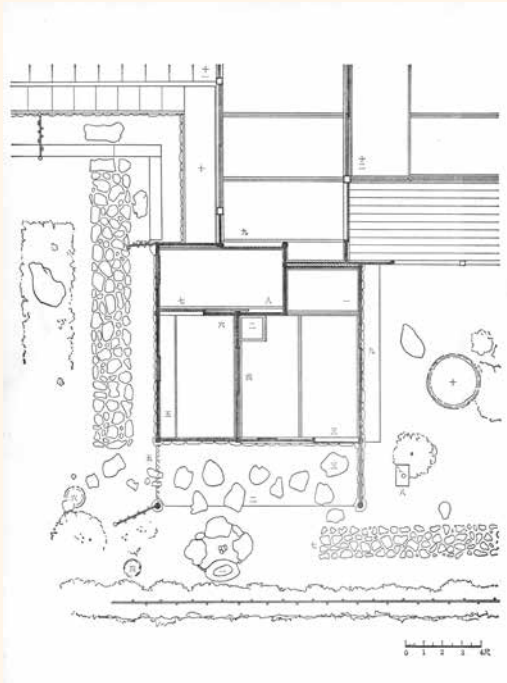
「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

以上三回の連載にわたって『利休の茶』を読み解いてきた。『利休の茶』において取り上げられたのは、茶杓、炭、茶会である。堀口はそれらに関する文献や素描などを通して、茶の湯における「非相称」、「花」、「心」の問題を問うていた。換言すれば、堀口はそれらの諸問題を、利休の茶室論を主導する重要な概念と位置づけ、かれ自らの建築論と重ね合わせることによって理解しようと努めたのである。

連載のはじめに堀口以降の建築家たちが、茶室を空間という観点から捉えようとしたことを示した。そのことは、堀口が茶杓や炭、茶会を、そのみで完結したものと捉えるのではなく、たとえば茶杓を茶掬いのためのものとして、炭を沸湯かしのためのものとして、茶会を主客が茶の湯の真髄を感じとる経験の場として捉えようとしたこととも重なり合うと思われる。つまり茶室は単なる物としてではなく、主客によってひとときの茶会が営まれる空間の問題として読み解かれることによって、はじめて時代や用途を超えて近代建築へと敷衍されえたと考えられる。

最後に近代における茶室の意義について検討し、筆をおこう。

近代において茶室に見出された空間の問題は、それが依拠するところの茶の湯の構造に大きく関係していると考えられる。茶の湯は、ある形式を伴って、茶会として具体化さ



(左) 妙喜庵園「待庵」とその路地

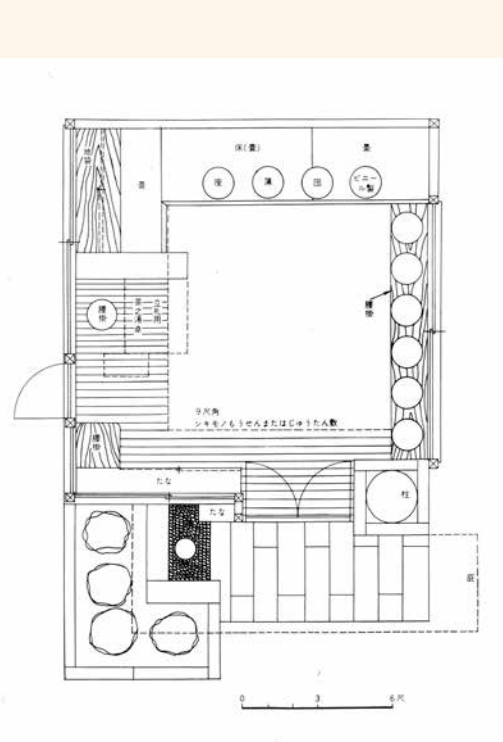
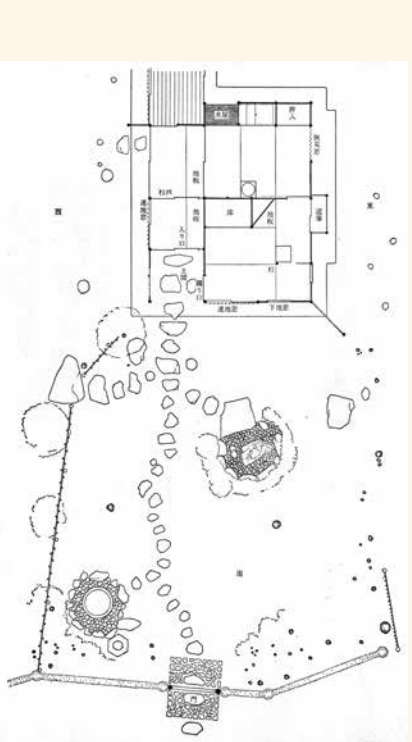
「利休の茶室」（鹿島研究所出版会、1968、p.389）より転載。「利休の宜しさや儂さは、あるいはその好ましさ、時には恐ろしさは、私にはいつもこの妙喜庵園を通して来る。利休の妙喜庵園なしに、私には利休はなかったかも知れない。私は常に妙喜庵園を通して利休を見る。またこれを通して数寄屋造りを見るのである。しかもそれは日本の数寄屋造りを。数寄屋造りの意匠理念は、今も建築の理念として、世界に生きている。そのような数寄屋造りを。」（同書、pp.10-11）

(中) 京都正伝院屋敷如庵（東京移築後）

「茶室研究」（鹿島研究所出版会、1969、p.107）より転載。「国宝茶室如庵は、妙喜庵茶室と共に、数寄屋造りの古典であつて、その頂を占める大きな存在である。私はこの二つによって、茶室なるものを教えられたのであつた。」（同書、p.51）

(右) 美似居の間取り図

「堀口捨己作品・家と庭の空間構成」（鹿島研究所出版会、1974、p.181）より転載。新日本茶道展覧会（1951）では、待庵、如庵、残月亭の展示とともに、堀口の「美似居」、谷口の「木石舎」がつくられた。



(左) 妙喜庵園「待庵」とその路地

「利休の茶室」（鹿島研究所出版会、1968、p.389）より転載。「利休の宜しさや儂さは、あるいはその好ましさ、時には恐ろしさは、私にはいつもこの妙喜庵園を通して来る。利休の妙喜庵園なしに、私には利休はなかったかも知れない。私は常に妙喜庵園を通して利休を見る。またこれを通して数寄屋造りを見るのである。しかもそれは日本の数寄屋造りを。数寄屋造りの意匠理念は、今も建築の理念として、世界に生きている。そのような数寄屋造りを。」（同書、pp.10-11）

(中) 京都正伝院屋敷如庵（東京移築後）

「茶室研究」（鹿島研究所出版会、1969、p.107）より転載。「国宝茶室如庵は、妙喜庵茶室と共に、数寄屋造りの古典であつて、その頂を占める大きな存在である。私はこの二つによって、茶室なるものを教えられたのであつた。」（同書、p.51）

(右) 美似居の間取り図

「堀口捨己作品・家と庭の空間構成」（鹿島研究所出版会、1974、p.181）より転載。新日本茶道展覧会（1951）では、待庵、如庵、残月亭の展示とともに、堀口の「美似居」、谷口の「木石舎」がつくられた。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

れる。茶会は、茶を飲み、食事をし、会話をするという極めて日常的な生活行為が中心となって展開される点において、日常とは不可分のものでありながら、それらの行為の順序や所作が厳密に形式化されている点においては非日常的な要素をもつ。茶会の独自性とは、日常と非日常という背反的な二要素が同時に満たされていることである。すなわち、日常的な生活行為が単なる表現的意味のみをもつものとして形骸化されたときには、それは日常から完全に切り離されたものとなり、一方で非日常的な生活行為が繰り返され、定着したときには、それは翻ってまた日常へと還元され、埋没してしまう。茶会においてはこうした課題が乗り越えられ、あくまでも日常的な生活行為が、美へと差し向けられるなかで、表現されると同時に自乗的に顧みられ、その都度自覚的に展開されるのである。このように、茶会は、日常と非日常とを絶えず往還するという仕方において、日常性を超えるという構造をもつ。ここでは、日常性のうちに忘却されようとしている生活そのものを自覚的に取り戻そうとすることにおいて、まさに生活の意味が問われていた

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

のである。こうしたなかで、生活の場としての建築もまた同様に問われていた。すなわち、日常的な生活において建築は、絶対的な信頼性、有用性に基ついて使われることのうちに、ともすれば人間との真の出会いを失ってしまう。その典型的な事例としてあげられるのが、農家であろう。茶室はしばしばそれらを参照していると言われるが、ここでは、単なる形象の模倣ではなく、農家に必然的に備わった機能性、合目的性の意味が真に解明され、自覚的に再構築されている。茶室においては、このように日常性が一旦否定されることによって、まさに人間の根源的に生きる場としての建築の意味が、改めて問い直されていた。そうはいうものの、茶室はたとえば舞台や社殿のように日常から完全に切り離されたものではない。それはあくまでも日常的な生活形式に基ついて実際に使われるものでもある。つまり、茶室は、日常的なものとしての道具や設備と、非日常的なものとしての作品とのはざまを、連続的に往還するような、いわば仮設的なありかたをする。そして、こうした仮設性にこそ、茶室の特質があると言

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

「茶室」の「茶」は「茶室」の「茶」である。茶室は「茶室」の「茶」である。

えよう。すなわち、茶室においては、日常から完全に切り離されることによって顕著に見出される真理そのものよりも、むしろ日常に根差しつつ、常にそこから超えようとすることによって真理を問い続けることこそが、何よりも重要とされているのである。

利休の茶室は 実際今日に於ては 単に茶室だけのものではない。茶室以上の建築である。彼の茶室は 建築そのものの本然の問題をほらみ、<sup>ザツハリツヒ</sup> 事物的な要求を如何に建築的に解いたかを物語る教書であるやうに思ふ。そこに今日利休を探り、利休をとり上げる現代建築の立場があるのである。（堀口捨己『利休の茶室』、岩波書店、1949、pp.3-4）

近代建築家にとって茶室とは、茶人による問いの痕跡として遺された「教書」であると同時に、建築家自身に向けて開かれた問いそのものであった。かれらは茶人による「建築」なるものへの問いを辿り直しつつ、またそこに建築家である自らの問いを重ね合わせていたのである。（了）